

川合増太郎教授・小林好和教授退職記念号によせて

札幌学院大学人文学部長

岡 崎 清

2016年3月末日をもって長年人文学部を支えてくださいました川合増太郎教授と小林好和教授がご退職されました。

川合増太郎先生は東京教育大学大学院で独語独文学を修め、1978年4月、前年の人文学部開設にあわせて本学に専任講師として着任されました。当時の肩書は札幌商科大学商学部講師であります。以来38年の長きにわたり人間科学科の文化領域と全学の教養科目独語をご担当されました。この間、1986年に助教授昇任、2001年に教授昇任を果たされ、学内行政においては図書館長、理事・評議員の要職にも就かれました。先生は大学全体を見通しながら、あるべき姿としての本学について多くのことを語り、私にご助言を頂戴しました。当時の一般教育会議に始まり、理事になられると広報室の大川幾子氏とともに「高校生作文コンクール」を立ち上げ、大学の広報・知名度アップに貢献されました。また、理事職を退かれてからは学部の就職委員としてインターンシップの推進役を引き受け、孤軍奮闘されたお姿を今でも忘れることができません。

先生のご研究はカフカ研究を中心とするものでありましたが、日本文学にも造詣が深く、履修している学生から先生のレジュメを見せてもらう機会があり、じつに丁寧な教材研究をなされておられ感服いたしました。学会においては北海道ドイツ文学会会長、日本独文学会北海道支部長を歴任され、後進の指導にもあたられました。誠実でまっすぐな先生は、ときに誤解を受けることもあったかもしれません。けれども決してぶれない先生の高貴な精神は昨今の大学に欠けるものであり、定年退職とはいえ先生のご指導を受けられなくなったことは残念でなりません。ご退職後は故郷の静岡で晴耕雨読の日々と拝察いたします。今後も本学を見守っていただき、叱咤激励をお願いしたく存じます。

小林好和先生は北海道教育大学ならびに大阪教育大学大学院で教育学を修め1985年4月に助教授として着任されました。以来本学では31年の長きにわたり教壇に立たれ、多くの学生を教育界に送っていただきました。その貢献は大なるものがあります。1995年、教授に昇任された後、とくに21世紀に入った2001年からは人間科学科長、教務部長、こども発達学科長、人文学部長の要職に休む暇もなく就かれました。人文学部はもとより本学が先生を必要とした時期でもありました。本学が入試動向で厳しさをましてきた頃、先生は「こども発達学科」の開設を果敢に提案され、理事会もこれを承認し、今日に至っております。さらに人文学部長として保育士養成課

程も先生のリーダーシップによって置くことができました。こども発達学科長から人文学部長へと先生のお仕事は格段に増えましたが、先生はご自身の教育活動の手を緩めることなく学生と接しているお姿を毎日拝見しておりました。学部運営においては、人事を例にとりまずと学部採用人事委員会で「全員一致」を原則とし、みせかけの一致は退けられました。多忙を極める中、国内留学研究制度の成果として東北大学大学院博士後期課程に在籍され2004年3月には博士（教育学）を東北大学から授与されました。

先生のご研究は「子どもの表象の生成とその変換過程」であります。教育心理学、発達心理学の分野において多くの業績を残されたことは申すまでもありません。人文学部こども発達学科が、人間科学科から枝分かれして誕生したことを思いますと幼児から青年に至る人間の発達過程を統合する視点を先生はお持ちだったように拝察します。学会では日本発達心理学会、日本教授学習心理学会でご活躍されました。

小林先生はご定年の2年前にご退職の決意を固められました。最後のゼミ生のことが心配でならない先生は、ご退職後も非常勤講師として継続してゼミのご担当（2016年度前期）に従事されました。それも2016年度末で最後のゼミ生が社会に羽ばたかれます。病をおして最後まで渾身の力を振り絞って学生の教育にあたられた先生のお姿を、学生の声がかどます研究室の前を通るたびにちらちらと拝見しておりました。私は学部・大学運営のご相談で何度も先生に時間を割いていただき、感謝の言葉もみつきりません。一日も早い先生のご快復を学部教職員一同祈念しております。

川合増太郎先生、小林好和先生の長年にわたる本学へのご貢献により、おふたりは札幌学院大学名誉教授の称号を授与されました。本号『紀要』発刊にさいし、人文学部はここに両先生の退職記念号を編み、感謝の印とさせていただきます。おふたりのご健勝を心よりお祈り申し上げます。